

ママが作った手作り人形

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 田中 宏



長女が3歳くらいだった時であろうか。人形が欲しいとただをコネたことがある。私は男3兄弟だったので、正直、女の子が欲しがると人形がよく

分からなかった。自分の考えとは裏腹に、妻はその日のうちに100円ショップで買ったフェルト生地で作った人形をあげた。妻はそれほど器用なほうではなく、出来ばえはお世辞にも良いとはいえない代物であったが、長女はママが作った手作り人形をとて気に入り、起きても寝ても常に一緒に遊んでいた。

私は自分が女の子のおもちゃについて無知であったことの反省から、いろいろと勉強を始めた。娘を持つ同僚に聞いたり、若手の看護師さんからも情報を収集した。すると、やはり人形といえば定番の“リカちゃん人形”であった。私は親バカとは承知しつつも、すぐにリカちゃん人形を買いに行き、リカちゃん人形とリカちゃんハウスをセットで買ったのだ。もちろん、ドヤ顔だったことはいうまでもない。

それから数週間が過ぎた。自分が買ったリカちゃん人形とリカちゃんハウスは、さぞ気に入ってくれていると疑わなかった。何と

言っても、数多くの女子からリサーチをした結果なのだから。

しかし、長女は相変わらずママの作った手作り人形で毎日遊んでいて、私が買ったリカちゃん人形ではほとんど遊んでいない様子であった。

私は無意識に「ママの作った人形より、リカちゃん人形のほうが高いんだからこっちで遊ぼうよ」と言うと、長女は「でも、これママが作ってくれたんだよ!」と言ったのである。

私は大きな勘違いをしていたことに気付いた。3歳の長女にとって、人形の値段は関係はないことなのだ。長女にとって大切なのは、人形に込められた思いなのである。つまり“ママが作ってくれた手作り人形”が気に入っていたのだ。3歳ならではの素直な気持ちである。

私は、妻の思いよりもお金の価値を知らず知らずのうちに長女に押し付けていたことになる。いつも「人の気持ちや思いを大切にしたい」と言っておきながら、無意識に真反対の行動をしていた自分を猛省した。

大切なことに気付かせてくれた長女と妻に感謝である。